分　　野　（　３　）気管支ぜん息の動向等に関する調査研究

研　究　課　題　名：気管支ぜん息患者の長期経過及び変動要因

申　請　課　題　名：気管支ぜん息の動向等に関する調査研究

調査研究代表者氏名：谷 口　正 実

評価コメント
・本研究は継続することにより、より意義が明らかになると思う。 ・ぜん息が呼吸機能低下を起こすか否かという問題は、これまで世界的にもいろいろ報告されて来た議論の多い重要なテーマである。 ・成人ではレセプトのメタボ健診でのデータを利用しての成人ぜん息の発症因子の前向き調査である。 ・成人では、レセプト情報に基づく研究で、肥満の関連が明らかにされ、喫煙対策とともに生活習慣指導の重要性が認識され、目的に沿った成果があげられている。 ・成人のぜん息診断をレセプトに主に準拠した大規模研究は、カナダなどの研究と比較しても、科学的な意義は大きいと考えられる。 ・特に女性に於ける肥満とぜん息の発症との間の相関が明瞭にしめされた事は意義深い。 ・レセプト情報による発症と患者情報（病院の医師による確実なデータ）での比較が必要になるのではないか。 ・成人部門では、肥満との関連が明確にでているが、短期間で肥満になるリスクがあるのではないかと思われるので、考察を十分に行っていただきたい。 ・女子における肥満の悪影響は気管支ぜん息の臨床経過や治療上の意味づけが課題であろう。 ・減量による効果の科学的背景として女性ホルモン・アディポサイトカイン、炎症性サイトカインなどの検討も加えた検討に期待する。 ・小児では、既に登録された小児ぜん息児患児についての追跡でのフォローアップである。 ・小児部門では、呼吸機能の発達による遅れの調査を行っており、重要な知見となると思われる。 ・今回は家庭での調査になるので、単純な比較ができないのは残念であるが、分析の成果に期待する。 ・小児では、簡易呼吸機能検査機器による評価が予定通り開始され、JPGLの成果を客観的に評価できるのが楽しみである。 ・小児班の継続的研究にアスマワンを導入して肺機能評価を加えたことは評価する。

・アスマワンのデータ評価には小児肺機能発育を考慮したコントロールをどのように設けるのかが課題となるであろう。

・特に小児期から長期にわたって追跡調査できるならば貴重な有意義なデータとなる。この場合、呼吸機能の解析で重要なのは患者自身が有する本来の呼吸機能とぜん息の病態が充分沈静化していないため気道狭窄を起こして修飾された呼吸機能とを厳重に区別して、できるだけ本来の呼吸機能を測定するようにしなければならない。

・小児期におけるぜん息の吸入ステロイドによる加療が、成人になってからのぜん息の長期寛解にどの程度寄与できたか否かは興味あるテーマであり、是非、信頼性の高いエビデンスを構築して欲しい。

・1096名が経過観察中ですでに5年の経過が判明しているが予定の寛解率、成人ぜん息への移行率等にどの程度の数が必要かを計算し、それに向かって努力することが望ましい。